

グリム、ペローとバジール・メールヘンについて

北 垣 篤

内 容 目 次

は し が き

I グリムの《狼と7匹の小ヤギ》

- 1) 《狼と7匹の小ヤギ》の日本における受容
- 2) ヤーコブ・グリムによる《狼と7匹の小ヤギ》の採集
- 3) 《狼と7匹の小ヤギ》とペローの《赤ずきん》
- 4) グリムの《狼と7匹の小ヤギ》の源流

II ペローの《赤ずきん》とグリムの《赤ずきん》

- 1) ペローの《赤ずきん》の内容紹介
- 2) ペローの《教訓つきの昔話》
- 3) グリムの《赤ずきん》の採集とペローの《赤ずきん》

III バジール、ペローおよびグリムのメールヘン

——三つの眠り姫の物語——

- 1) 魔法によって眠った人間の物語のテーマ
 - a) 7人の眠れる聖人伝
 - b) フルターニュの民話
 - c) ゲルマンの英雄伝説—ブリュンヒルトの眠り
- 2) バジールの《ソーレ、ルーナとターリア》
- 3) ペローの《眠っている森の美女》とバジールの《ソーレ、ルーナとターリア》
 - a) ペローの《眠っている森の美女》
 - b) ヘルスフォレのトロワリュとゼラディヌの物語
- 4) グリムの《いばら姫》とペローの《眠っている森の美女》とバジールの《ソーレ、ルーナとターリア》
 - a) グリムの《いばら姫》の内容紹介
 - b) グリムの《いばら姫》とペローやバジールのメールヘンとの関連

IV 《童話》と《メールヘン》

あ と が き

参考文献一覧表

は し が き

ドイツのグリムの《家庭と子供のためのメールヘン》と、フランスのペローの《教訓つきの昔話》と、イタリアのバジールの《ペンタメローネ》は、全部ではなくても、それらのうちの幾篇かは、その間になんらかの関連性がないだろうか？そういうアイディアが浮かんだのは、3年前に《寓話文学周辺のジャンル》（茨城大学教養部紀要・第4号）の中で

《メールヘン》について書いた時である。その時も、例話として《いばら姫 Dornröschen》、《眠れる森の美女 La Belle au bois dormant》、《太陽と月とターリア Sole, Luna e Talia》を扱ったが、その中で民間説話の移入について初歩的な誤りをおかしたことを、いま告白しておく。つまり、グリムが《マリーおばあさん》の口から採録した《いばら姫》について《イタリアの古いメールヘンが、すでにドイツにも移入されていて、長い間にドイツの民間説話として定着したと、見るべきであろう》と書いたわたしの推論は、まったく科学的な実証を欠いていた。今回もやはり同一の例話に焦点をあてて、民間説話の源流や影響等を確実な文献資料の力をかりて調べてゆきたい。これがこんどの小論の第一の眼目である。つぎは、グリムの《狼と7匹の小ヤギ》やペローの《赤ずきん》やグリムの《赤ずきん》のテーマと事件の内容の比較を行ない、各々のメールヘンの源流を究めていきたい。それには、最小限度ながら例話の完全な邦訳を紹介したい。これは原稿を長くするためでなくて、すべて説話文学の解釈説明には、完全な例話の紹介が必要ならば多いからである。この点ご容赦ねがいたい。最後に、とにかく単純に片づけられている《童話》と《メールヘン》の語源と概念について、この際はっきりした考えを持ちたいと思っている。

I グリムの《狼と7匹の小ヤギ》

1) 《狼と7匹の小ヤギ》の日本における受容

上田万年(うへだ・かずとし)訳の《狼おほかみ》は明治22年に出た。柳田泉氏はこれについて次のように解説している。

《上田万年は明治21年帝国大学文学部を卒業しているから、その翌年の仕事がこの「狼」で、上田万年重訳とあるのは英語訳でも使ったのであろうか》

この訳本の表紙の左肩に《家庭叢話第一》とあるから、家庭用、児童のお伽話として出版されたのだろうが、いまその訳文を読むと修身の教科書の臭いがする。訳本のテキストは不明だが、これをグリムの《子供と家庭のメールヘン Brüder Grimm: Kinder-und Hausmärchen》の原文と比較してみると、原文にはない文章が数ヶ所を占めている。たとえば一例を引用してみよう。

《アーそのとき、羊のおっかさんは、子供たちをくはれて、どんなに泣いたらう、どんなにかなしかったらう。このお話を聞くみなさんには、このときの女羊の心を察することが出来ますか。》

上文の下線の部分は実際にドイツ語の原文にはなくて、おそらく訳者がかってにつけ加えたものであろう。明治以降のイソップ寓話の邦訳書の中にも、訳者が原文を離れて自分の感想や自己流の《寓話の教訓》を添えている寓話にぶつかることがある。それと同じような文章を上田万年の《狼》の中に、いくつか見出すことができる。そして、《狼》はメールヘンの面白さよりも、むしろ寓話の《教訓》を読者に伝えようとしているらしい。《独逸グリム氏原著、日本上田万年重訳》の《狼おほかみ》では、日本の着物をつけた狼やヤギの母と子供の挿画がおもしろい。このメールヘンの日本版も、人間の衣を着た動物の物語だが、逆に動物のマスクをかぶった、人間同士の事件を描いた動物寓話とみなすこともできるのではなかろうか? この《動物寓話》の結尾に《教訓》を添えれば、つぎのとおり

である。

《こわいろうを使ったり、変装したりして弱い者をたぶらかし、殺そうとたくらむ外敵には、くれぐれも用心なさい！》

さて、グリムの《狼と7匹の小ヤギ》は明治28年に巖谷小波が《少年世界》に《子猫の仇》という翻案物を発表している。これは狼が狂犬に、7匹の小ヤギが5匹の子猫に変わっているだけの筋書で、当時の児童文学作品として評価されている。

2) ヤーコブ・グリム (Jacob Grimm, 1785—1863) による《狼と7匹の小ヤギ Der Wolf und die sieben jungen Geißlein》の採集

ドイツのヘッセン州にヴィルトという薬局があった。そこに、マリーおばあさん《die alte Marie》と呼ばれた婦人が家政婦として勤めていた。ヴィルヘルム・ショーフは《グリムのメルヘンの成立史》の中で、マリーおばあさんの素姓をくわしく追っているが、彼女の本名はマリー・ミュッラ《Marie Müller》といい、夫はアメリカの独立戦争で亡くなった。マリーおばあさんはドイツに昔から語り伝えられてきた話をグリム兄弟に提供した、最初の女性である。兄のヤーコブ・グリムはマリーおばあさんから聞いた《狼 der Wolf》という話を記録し、1812年に発行した《子供と家庭のメルヘン Kinder-und Hausmärchen》の第一巻に収めている。その題名はわたしたちの知っている《狼と7匹の小ヤギ》に変わっている。これは1810年の《エーレンベルクの原手記版メルヘン Ölenberger Märchenhandschrift》の中にも入っている。

3) 《狼と7匹の小ヤギ》とペローの《赤ずきん Le Petit Chaperon Rouge》

グリムのこのメルヘンとシャルル・ペロー (Charles Perrault, 1628—1703) の《赤ずきん》はテーマが大変似ている。人のいい《赤ずきんちゃん》と呼ばれた美しい村娘が、見ず知らずの狼とうかつにも言葉を交わしたことが、ペローのこの残酷なコントのモチーフになっている。また、病気で寝ていたおばあさんが、孫娘のこわいろうをまねた邪悪な狼の言葉を頭から信用したことが、この悲劇の誘因ともなった。グリムの《7匹の小ヤギ》もずる賢い狼の巧みなこわいろうと変装に、まんまと欺まされて狼を家の中に入れてしまう筋書だ。ここまでは共通したテーマだが、グリムの話では、狼がががつとあの鋭い歯で小ヤギを食わないで、6匹とものみこんだことが、このメルヘンのおかしみとなっている。このために、ペローの《赤ずきん》の悲劇は避けられている。アンドレ・レリティエ (Andrée Lhéritier) 編の《ペローの昔話 Perrault Contes》には、《赤ずきん》の注釈の中で《グリム兄弟のメルヘン集のなかには、この赤ずきんの人気ある多くの別形がある》と書かれている。その別形とは《狼と7匹の小ヤギ》、《赤ずきん das Rotkäppchen》をさしていることは間違がない。イタリアのパジーレ (Giambattista Basile, 1575—1632) の《五日物語 Il Pentamerone》には、このテーマの物語は今のところみつからない。

4) グリムの《狼と7匹の小ヤギ》の源流

このメルヘンはフランス人好みの話で、そのふるさとはおそらくフランスであろう。12世紀のフランスの最初の女流詩人といわれている、マリ・ドゥ・フランス (Marie de France) の寓話集イズベ (Isopés) のうちに、《狼とメヤギ De lupo et capra》という寓

話がある。

1 匹のメヤギが草地のある所へ行こうと思いました。彼女は小ヤギを自分のところに呼び、かあさんが戻るまでは、ちょっと言葉をかけられたり、頼まれたりしても、ぜったいにけものを家の中に入れてはならぬと、きびしく禁じました。メヤギが森に出かけたとき、狼は彼女を見ました。すると、狼は小ヤギの所へでかけて、メヤギのこわいろを使い、戸口を開けてくれないかと頼みました。小ヤギは「おかあさんのような声はしても、体はまるっきり見せないじゃないか？ここを立ち去れ、この強盗めが！お前がおかあさんでないことは、わかりきっているぞ」と答えました。もしも小ヤギが狼を家の中に入れたら、狼は小ヤギを食ってのみこんでしまったでしょう。

だから、分別ある者はたやすく悪い助言を信じないことと、作り事を真に受けてはならぬことを学ぶべきです。だれでも助言を与えることができるけれども、すべての助言が有益であるとは限りません。悪者や嘘つきは悪い助言を与えますから。

この寓話のハントリングはペローの《赤ずきん》のような悲劇に終わっていないし、グリムのメルヘンのように、狼に子ヤギがのみこまれもしなかった。しかし「もしも小ヤギが狼を家の中に入れたら、狼は小ヤギを食ってのみこんでしまったでしょう」という文章は、ペローの《赤ずきん》とグリムの《狼と7匹の小ヤギ》へ話が発展できる可能性を暗示しているだろう。《だから、分別ある者は……》というしめくくりの文章は、言うまでもなく、寓話の《教訓 Lehre; Moral》である。

マリ・ドゥ・フランスの《狼とメヤギ》は中世のロムルス寓話《小ヤギと狼》に大変よく似ている。彼女は中世のラテン語の散文《ロムルス寓話集》を基にして約100篇の寓話を書いた。ベルンの名門の出身でドミニコ修道会の僧侶、ウルリッヒ・ボナー（Ulrich Boner, 1324-49）の韻文による寓話集《宝石 der Edelstein》の中に《狼とメヤギ》という寓話がある。文章はロムルスの《小ヤギと狼》よりも簡潔だが、内容はまったく同じであるから、ロムルスの系統を引く寓話である。

Ⅱ ペローの《赤ずきん Le Petit Chaperon rouge》と グリムの《赤ずきん Rotkäppchen》

1) ペローの《赤ずきん》の内容紹介

むかし、まだだれも見ることがないような、かわいい村娘がいました。おかあさんは目の中に入れても痛くないほど、この子がかawaiiかったが、おばあさんのかわいがるようすはそれに輪をかけたほどでした。このやさしいおばあさんが、この子に小さな、赤いずきんを作ってやったところ、それがまたとても似あうので、だれもがこの子を赤ずきんちゃんと呼んでいました。

ある日のこと、おかあさんがパン・ケーキを焼くと、赤ずきんにこう言いました。

《おばあちゃんの体のようすを、ひとつ見てきてくれないか。病気だそうだからねえ。
パン・ケーキとバターを少し持って行ってちょうだい》

赤ずきんは、さっそく、別の村に住んでいたおばあさんの家へでかけました。森の中を

通っていくと、狼のおじさんに出会いました。狼は赤ずきんを食ってしまいたかったが、森のあちこちに木こりがいるので、とてもその勇気がありませんでした。狼は赤ずきんに行く先を尋ねました。かわいそうにも、女の子は、立ちどまってひとの言葉に耳をかすことがどんなに恐いとも知らないで、こう言いました。

《おばあさんに会いにいくところよ。おかあさんのお使いで、パン・ケーキとバターをすこしばかり持って行ってあげるの》

狼が女の子に《おばあさんの家は遠いの？》と言いました。

赤ずきんは《ええ。ほうら、ずっとあそこに見える風車小屋の向うなの。村のとっつきの家よ》と言いました。

《それじゃ、わしもおばあさんに会いに行くでしょう。わしはこの道に行くからね。お前はそっちの道を行きなさい。どっちが早くつくかやってみよう》と狼が言いました。

狼は近道をいっしょうけんめいに走りだしました。ところが、女の子はハシバミの実を拾ったり、チョウチョウを追いかけたり、途中で見た花で花束を作ったりして、遊びながら遠まわりして行きました。

狼はじきにおばあさんの家につくと、ドアをたたきました。《トン、トン！》

《だれだい？》

狼は女の子のこわい声を使って言いました。

《孫娘の赤ずきんよ。おかあさんのお使いで、パン・ケーキとバターをすこしばかり持ってきてあげたわ》

すこしかげんが悪かったので、ベッドに休んでいた、人の好いおばあさんは大声で言いました。

《くさびをぬいてごらん。さんがはずれるから》

狼がくさびをぬくと、ドアがあきました。狼は人の好いおばあさんにとびかかり、あっという間に食ってしまいました。三日の間にも食っていなかったからでした。それから、ドアをしめておばあさんのベットへ寝にいき、赤ずきんの来るのを待っていました。しばらくすると、女の子はやって来てドアをたたきました。《トン、トン！》

《だれだい？》

狼のがさがした声を聞いた赤ずきんは、はじめのうちはこわかったが、おばあさんがかぜを引いていると思って、こう返事をしました。

《孫娘の赤ずきんよ。おかあさんのお使いで、パン・ケーキとバターをすこしばかり持ってきてあげたわ》

狼は声をすこしやさしくして、大声で言いました。

《くさびをぬいてごらん。さんがはずれるから》

赤ずきんがくさびをぬくと、ドアがあきました。女の子が入ってくるのを見た狼は、ベッドの中に隠れて、掛けぶとんをかぶったまま、こう言いました。

《パン・ケーキとバターのつぼを、おひつの上におき、ここに来ていっしょに寝な！》

赤ずきんは服をぬいでベッドに入ろうとしたとき、おばあさんの裸のようすを見て、とてもびっくりしました。

《おばあさん、おばあさんの腕はなんて大きいんでしょ！》と、赤ずきんは言いました。

《それはね、お前をしょうずに抱くためさ！》

《おばあさん、おばあさんの足はなんて大きいんでしょう！》

《それはね、はやく走るためさ！》

《おばあさん、おばあさんの耳はなんて大きいんでしょう！》

《それはね、よく聞こえるためにさ！》

《おばあさん、おばあさんの目はなんて大きいんでしょう！》

《それはね、よく見えるためにさ！》

《おばあさん、おばあさんの歯はなんて大きいんでしょう！》

《それはねお前を食うためさ！》

そう言って、このたちの悪い狼は赤ずきんにとびかかり、女の子を食ってしまいました。

《教 訓》

この話でもわかることは、年齒のいかぬ子供、ことに美しくて、姿かっこうのよい、かわいい女の子が気を許して、人の言葉に耳をかすのは、とんでもないことです。そのために、狼に食われてしまう子がたくさんでも、別にふしぎではありません。狼といっても、みんな同じようすをしているわけではありません。なかには、親切な狼もいて、騒ぎたてたり、悪意を抱いたり、怒ったりいたしません。彼らは親しみがあがり、あふれるばかりの好意も持っており、その上、温和な性格で、お嬢さんを家の中まで、女べやへも送りとどけます。だが、悲しいことには、こうしたいかにもやさしそうな狼が、すべての狼のうちで一番危険な奴だということは、だれでも知っています。

2) ペローの《教訓つきの昔話 *Histoires ou contes du temps passé, avec des moralités*》

ペローは《赤ずきん》の話の筋書よりも、結尾に添えた《教訓》に重点をおいているようにみえる。J.-P. バイヤールは《伝説の歴史》の中で、《赤ずきん》の破戒のテーマについて、ユッソン (Husson) の神話学の一説を紹介しているが、ただ今のところは参考文献もないので、後日の研究課題としよう。いずれにしても、ユッソンは古代インドのヴェーダ神話を考えているらしい。《赤ずきん》という説話の源流について、ジルベール・ルジェ (Gilbert Rouger) はクラシック・ラルースの《Perrault: Contes》の中で、《赤ずきん》の生国はまちがいになく、インドかバクトリアだと唱えている学者がいて、書いている。

さて、ペローの《教訓つきの昔話》は8篇から成っている。《眠っている森の美女 *LA BELLE AU BOIS DORMANT*》、《赤ずきん *LE PETIT CHAPERON ROUGE*》、《青ひげ *LA BARBE-BLEUE*》、《長靴をはいた猫 *LE MAITRE-CHAT OU LE CHAT-BOTTÉ*》、《仙女 *LES FÉES*》、《灰かぶり娘 *CENDRILLON OU LA PETITE PANTOUFLE DE VERRE*》、《まき毛のリケ *RIQUET A LA HOUPPE*》、《おやゆび小僧 *LE PETIT POUGET*》

これらの昔話の一つ一つのコントの結尾に《教訓》が添えられているので、読者は《寓話》を連想するが、ペローはフランスに昔から語り伝えられている民話を語り手の言葉に従って忠実に彼自身のことばで再現したと、いわれている。おそらく語り手は一人ではなかったろうから、これらの8篇のコントには、ペロー自身のスタイルの統一を容易に認めることができる。要するに、それらは口承文学 (*la littérature orale*) の直系から生まれた物語で、1697年にはじめて本として、クロード・バルバン書店 (Claude Barbin) より出

版された。シャルル・ペローは60才で公職を退くと、サン・ジャック城外地区にひきこもった。それはサミュエル、シャルル、ピエールという3人の息子の教育に専心するためであった。彼らのために、ローマ時代のファエルのラテン語の寓話をフランス語に翻訳することに力を注いだり、彼の《生涯の回想録 *Mémoires de ma vie*》を書いたりした。ことに《昔話》を採集したのも子供たちを喜ばせるためだった。1697年に出たこの小さな本は、むしろ彼の目から見れば愛すべき小品にすぎなかった。ペローはこの本の著者が彼自身であることを知られたくなかったので、末子のピエール・ペロー・ダルマンクールの名で出版した。だが、読者はこのカムフラージュにほとんどだまされはしなかった。彼は3年前の1694年に3篇の韻文のコント《グリゼリディ、ロバの皮、おかしい願い *Grisélidis, nouvelle, avec le conte de Peau d' Ane et celui des Souhais ridicules*》を堂々と本名で発表した。しかし、当時はまだ物語を韻文で書くことが常識だったし、また文学上の論争の反響にかかりあっていたので、ボワロー (Boileau) の皮肉な攻撃を恐れていたペローは、彼の採集した《昔話》を子供のように散文で書くことを恥かしく思っていたのだろう。ペローの《昔話》の公表は、それまでフランスの子供に与えられていなかった斬新な文学作品を提供したから、この事件はペローをフランスの児童文学の最初の旗手として、登場させる機縁を作った。

3) グリムの《赤ずきん》の採集とペローの《赤ずきん》

グリムの《赤ずきん》は二通りの話がある。おかあさんの言いつけを守らないで、花を摘みながら道草をした赤ずきんは、途中で狼に行先を教えたために、おばあさんも彼女も狼にのみこまれてしまう。しかし、猟師は鉄砲で大きないびきをかいている狼をうたずに、はさみでけもの腹を切って、おばあさんと赤ずきんを助けた。赤ずきんが大きな重い石を狼の腹の中につめこんだので、けものは跳んで逃げようとするが死んでしまう。第一番目のこの話のテーマはグリムの《狼と7匹の小ヤギ》とそっくりである。赤ずきんとおばあさんと6匹の小ヤギの命が助かったのは、狼があわてて彼らをのみこんだのと、ちょうど好い頃あいにはさみで狼の腹を切り裂いたので、中から無傷で出てこられたためだ。そして、狼を殺すことができたのは、大きくて重い石を狼の腹の中につめこんだからである。それが母ヤギの知恵であろうと、赤ずきんの知恵であろうと、狼の死因を作ったことには変わりはない。

グリムの《赤ずきん》の第二番目の話は、そのテーマが、先に記した、フランスのマリ・ドゥ・フランスの《狼とメヤギ》と同じで、赤ずきんの用心ぶかさがおばあさんと彼女を狼の攻撃から守った。そして、おばあさんの機転で、狼は大きな石の桶の中におちて溺れ死んでしまう。狼の死因はこのけものの強欲さと溺死である。この溺死は《狼と7匹の小ヤギ》と共通している。

ペローの《赤ずきん》はすでにのべたように、話の結末がきわめて悲劇的だから、読者に残酷な印象しか与えない。従って、コントそのものに喜びも慰めも見いだすことができない。ところが、グリムの《赤ずきん》となると、読者はひじょうな緊張の末に、やれやれと安堵の胸をなでおろし、話のみごとな幕切れに喝采を送るのである。

さて、グリムは《赤ずきん *Rotkäppchen*》をどんな経路で《子供と家庭のメールヘン》の中に採入れたのであろうか？ウィルヘルム・ショーフは《グリムのメールヘンの成立

史》で、《赤ずきん》はヴィルトの薬屋に住んでいた、当時62才の家政婦《マリおばあさん die Alte Marie》から1812年の秋に聞きただして、グリム・メールヘンの第一巻に収めたと、書いている。ところが、フリードリッヒ・フォン・デア・ライエン (Friedrich von der Leyen) の《ドイツのメールヘン DAS DEUTSCHE MÄRCHEN》によれば、《赤ずきん》の第一番目のテキストは、ジャンネット・ハッセンプフルーク (Jeanette Hassenpflug) から、第二番目の《マリおばあさん》から採集したとある。ところで、ジャンネット・ハッセンプフルークは名前の綴りが示すとおり、フランス系の女性である。彼女はカッセル市の行政区長官ヨハネス・ハッセンプフルークの娘で、妹はアマリー (Amalie) と言い、二人はグリム兄弟に民話を11篇寄与している。大部分はジャンネットが、アマリーは僅かだけ語り伝えた。姉のジャンネットはアマリーほど才能はなかったが、すぐれた語り手であった。姉妹らの母はユグノー教徒の家系の出身で、子供たちにたくさんのメールヘンを語って聞かせたことだろう。だから、姉妹がグリム兄弟に伝えたメールヘンの源流がフランスの民話であることは明白である。ハッセンプフルーク姉妹の提供したメールヘンで《子供と家庭のメールヘン》の第一巻に収められた、最も名高いものとしては、《コルベス Herr Korbes 氏》、《ツグミのひげの王様 König Drosselbart》、《青ひげ Blaubart》、《白雪姫 Schneewittchen》、《長靴をはいた猫 der gestiefelte Kater》、《赤ずきん Rotkäppchen の第一番目の話》等があるけれども、《青ひげ》の2つのメールヘンと《長靴をはいた猫》は、話の内容がペローのコントと、いちじるしく一致しているので、第二版では削除された。奇しき因縁でグリム兄弟は、もう一人のユグノー教徒の家系の婦人から、民話の寄与を受けている。彼女はドロテア・フィマンと言い、《子供と家庭のメールヘン》の第二巻にかなり多くの民話を提供している。

フランスの偉大な民俗学者ポール・ドラルユ (Paul Delarue) は《赤ずきん》に関して次のような意見を発表している。

《グリムの赤ずきんという昔話は綿密な比較が示しているように、また、いくつかの出来事においても明かなように、ペローの赤ずきんの血統を引いている。つまり、グリムの赤ずきんはペローの赤ずきんと同じディテールを展開しながら、ひとり悦に入って拡大した、同じ文学上の追加と欠陥を示している。グリム兄弟はフランス系の女性の語り手が提供した赤ずきんの昔話を収集した。彼女はドイツとフランスの昔話をごっちゃに記憶していた。彼女とその妹はグリムのメールヘン集の初版のために、ペローの他の3篇の昔話とオノワ夫人の1篇を提供したけれども、それらは再版からは削除された》

なお、柳田国男はその著《昔話と文学》の中で、《あまの・じゃく》のことをのべながら《赤ずきん》との比較をすこし行なっているが、この本題からはそれるので、これ以上触れないことにする。

Ⅲ バジール、ペローおよびグリムのメールヘン

—三つの眠り姫の物語—

1) 魔法によって眠った人間の物語のテーマ

魔法にかけられて長い間眠りつづけた人間が、なにかの機縁で突然眠りからさめる話は数限りなくあるであろう。眠らされるのは必ずしも美女ではないようだ。

a) 7人の眠れる聖人伝：マクシミアニス、マルフス、マルクス、マルティアニス、ディオニジウス、ヨハネス、セラピオン、コンスタンチヌスというふうに変わる名前の7人の聖人は、251年にデチウス皇帝の治下で迫害された。その迫害を逃れるためにエフェズスカ、東洋のある都市の洞穴に隠れたとき、1匹の犬といっしょに閉じこめられて眠ってしまった。そして、やっと446年になって、テオドジウス2世の時に眠りからさめ、重要な記録をさしだした。

b) ブルターニュの民話に、漁師がトルヌソル姫の眠りをさませた物語がある。

c) ゲルマンの英雄伝説には次の有名な物語がある。オーディンが不従順なブリュンヒルトを眠りのいばらで刺すと、彼女は魔法の深い眠りに陥いる。ジークルトは馬に乗って炎の防壁をつき抜け、眠っているブリュンヒルトの許について、彼女を眠りからさませる。

2) バジールの《ソーレ、ルーナとターリア Sole, Luna e Talia》

イタリアの17世紀の詩人ジャンバティスタ・バジール (Giambattista Basile) の《五日物語》の第五日の《第五番目の楽しいつどい》に語られた《ソーレ、ルーナとターリア》の内容を紹介しよう。

昔、りっぱな貴族がおりました。娘が生まれたとき、ターリアと名づけ、娘の運勢を占わせようとして、国じゅうの賢人や占い師をよびました。彼らはいろいろと相談した末に、娘は亜麻糸の切れ端が禍して大きな危険にさらされるだろうと、結論をくだしました。

そこで、殿さまはどんな不吉な運命をもさけさせるために、亜麻糸や麻糸やそのほかそれらと似た布地は、家の中に持ちこんではならぬと厳しく言いつけました。

さて、ターリアが成長して窓ぎわに立っていると、糸をつむいでいる、ひとりの老婆が通りすぎるのを見ました。ところが、ターリアは糸巻棒やつむ竿を一度も見ることがなかったから、踊っているようにみえるつむ竿がとても気に入りました。好奇心にとらえられ、老婆を彼女のへやに昇ってこさせました。彼女は糸巻棒を手にとると糸をのばしはじめました。しかし、運悪く糸の端が姫の爪の中に入り、彼女はアッと言う間に倒れて死んでしまいました。老婆は不慮の出来事におどろいて、いくつもの階段をまさかさまに飛びおりるように逃げました。不幸な父親は涙の桶でベルモットの手桶を支払ってから、死んだターリアを森の中にあるその宮殿のなかにおき、錦の天蓋の下にある、ビロードでおおわれた椅子に坐わらせました。それから、すべての戸口を固く閉ざし、受けた大きな不幸を忘れ去るために、かような禍のもとになった住まいを永久に捨てました。

しばらくしてから、こちらへ獵にきた、ある殿様の手もとからタカが逃げ、あの家の窓へ飛んでいきました。いくら呼んでも戻ってこなかったの、殿様はその家に人が住んでいると思い、ドアをノックせました。しかし、どんなにノックしても返事がないので、殿様はブドウ収穫人にはしごを持ってこさせました。そして、自分でその家にはしごをかけて登って、なかにどんな物があるかを見ようと思いました。登っていった家の中に入りました。生きた人間の姿がどこにもなかったの、あっけにとられてしまいました。そしてとうとう、ターリアが魔法にかかったようにしていた部屋にたどり着きました。

殿様は彼女が眠りつづけていると思って、彼女に声をかけました。しかし、何をしても、また、どんなに大声で呼んでも、その女は正気に戻りませんでした。そうしている間に、

彼女の美しさに殿様の心は燃え立ち、彼女を抱きかかえてベッドに運び、そこから愛の果実を摘み取りました。そして、彼女を寝かせてから彼の領地に帰ったとき、その家のことを長い間忘れていました。

9ヶ月たってターリアは双子を生みました。男の子と女の子だったが、まるで光り輝く二つの金の腕輪のようでした。二人の子供は、宮殿に姿を現わした二人の仙女に育てられました。彼らに母親の乳房をあてがったのは二人の仙女でした。ある時、二人の子供が乳を吸いたいと思ったとき、うまいぐあいに乳首が見つかりませんでした。彼らは糸が爪の間にささった、その指を口の中に入れて、それを思いきり吸ったので、糸の切れ端を外へ引っ張り出しました。その瞬間ターリアは深い眠りからさめたようでした。そして、すぐそばに宝石のようなあの二人の子供を見たので、乳房をあてがい、自分の生命と同じように大切にしました。しかし、その宮殿の中に彼女自身がひとりで、二人の子供といっしょにいるのに気づき、人の姿もみえないで食べ物が運ばれたので、どんな事が起ったのか、とんとなつとくがいきませんでした。

ある日のこと、殿様はあの美しい眠っている女性との恋愛事件を思い出しました。そして、たまたま、その地方へ獵に行った機会をとらえて彼女に会いにきました。殿様はその女性が眠りからさめて、すばらしく美しい二人の子供といっしょにいるのを見たとき、喜びのあまり、茫然となりました。そのとき、ターリアに彼の身分と事の一部始終を物語りました。殿様とターリアはいよいよ親密さを増し、大きなちぎりを結ぶに至りました。彼は彼らといっしょに数日間滞在しました。それから、ターリアを迎えにきて、彼の国へつれて帰ることを約束して別れをつげました。殿様は彼の家に戻ってからも、片ときもターリアと子供たちの名前を忘れませんでした。食事のときも、たえずターリア、ソーレとルーナということばをしゃべりました。(なぜならば、ソーレとルーナは子供の名前でしたから。)彼は夜寝に行っても、三人の名前を口に出して言うありさまでした。

夫が獵の帰りが遅れたことを知ったり、ターリアとかルーナというのを聞いたので、奥方の頭にちらっと疑惑の光がひらめきました。奥方は太陽の熱よりもつよい熱にとらえられました。そこで、秘書官を呼んで、こう言いました。《よく聴けよ。お前はシッラとカリディの間に、側柱と扉の間に、また、格子とかんぬきの間にいる。夫がだれに恋しているかを教えてくれたら、ほうびを取らせるぞ。もしも真実を隠すようなまねをしたら、お前の生死についてはかかわり知らぬぞ》

一方では恐怖のために動揺したが、他方では欲得にそそのかされたので、名誉の目にかけられた包帯であり、正義に対しても包帯であり、信仰に対してもすりへった蹄鉄の馬も同然であるその男は、奥方に本当の事を打明けました。

そこで、奥方は殿様の名で、その秘書官をターリアの許にやり、殿様が子供たちに会いたがっている旨を伝えさせました。これをきいて、ターリアはひじょうに喜び、子供たちを殿様の所へやりました。ところが、ギリシャ伝説のメデアのように残忍な心の持主の女は、子供たちを手に入れるが早いか、彼らを不幸な父親に食べさせるために、コックに子供らを殺して、いろんなうまい料理とソースを作るように命じました。

心が大変やさしいコックは美しさが金のように輝く二人の子供を見ると、かわいそうに思っ、彼らをかくまうように妻にたのみ、いくつかの皿に二頭の山羊の肉を盛りました。食事になったとき、奥方は食べ物を運ばせました。そして、殿様が《ほんとうに、これは

なんとおいしいのだろう！>とか<確かにこれはすばらしくうまい！>と大声で言って満足そうに食べている間、奥方はこう言って殿様を元気づけました。<さあ召しあがれ！あなたのものを食べているのですもの>殿様はこの言葉を二、三度ぼんやりと聞き流していました。しかし、彼女があいかわらずおしゃべりをやめないのがわかったので、殿様はこう答えました。<わしの物を食べているのはよくわかっているぞ。お前はなにひとつとして、この家に持ってきたことがなかったじゃないか！>殿様はふりふり怒って立ちあがり、心を静めるためにさほどはなれていない所にある別荘へ行ってしまうしました。

奥方は彼女がなしたと誤って思いこんでいる事にはまだ満足せずに、殿様がお待ちかねであるという口実のもとに、そのターリアを呼びに再び秘書官をやりました。すると、ターリアは彼女のひとみに会えるものと思い、火あぶりの刑が待っているとも知らずに大急ぎでやってきました。ターリアが奥方の前に連れてこられたとき、この女はネロのような顔つきででかんに怒りながら、ターリアに言いました。<ようこそいらっしやい、貴婦人！お前はあたしの夫を楽しんだ、あの上質な生地ではないか？また、あの上等な草ではないのか？お前は早い頭の回転で、あたしを待たせた、あの意地の悪いめす犬だろう？さあ、ここが煉獄だぞ！ここで、あたしに負わせた損害を、お前に償わせるぞ>

ターリアはその罪は彼女に帰属するのではなく、彼女が深い眠りに陥っていた間に、ご主人が領地を占有したことを弁解しはじめました。しかし、奥方は言いわけを聴こうとはしませんでした。そして、宮殿の中庭のまんなかに大がかりな火をつけさせ、ターリアをその中に投げこむよう命じました。

自分が殺されるのがわかった不幸な女は、奥方の前にひざまづき、せめて着ている服を脱ぐだけの時間を与えてくれるように、奥方に嘆願しました。この不幸な女をさほど憐れに思わなかった奥方も、金や真珠でしゅうした衣服を火あぶりから免れさせたい一心で、ターリアに<服をぬぎなさい！あたしには異存はないから>と言いました。

ターリアは服をぬぎはじめました。そして、着ているものを一枚ずつぬがされる度に、叫び声をあげました。それはこんなふうでした。衣服、スカート、粗い上衣をぬがされて、下着までもぬがされようとしたとき、最後の叫び声をあげました。一方では人びとは三途の河の渡し守のズボンを洗うあくを、熱湯によってつくるために彼女をひきずるように連れていきました。だが、その時おそく、その時早く、殿様がかけつけてきました。彼はその場の光景を見るなり、事の一部始終を知ろうと思いました。そこで、子供の安否を尋ねたとき、その奥方自身の口から、彼女は殿様の裏切りがうらめしいこと、および、子供たちは殿様に食べさせたことを聞き知りました。

殿様は身も世もないほど嘆き悲しみました。<それでは、わし自身がわしの小羊を食べた狼男だったのか？>—そうとなりました。<—ああ悲しい、どうしてわしの血管は子供たち自身の血の泉を知らなかったのだろうか？ああ、陰險な謀叛者め、お前の残忍さはなんとひどいものだったのだろうか！さあ、この犯罪の主謀者を集めろ！こんな残虐な顔をした人間を処刑するために、コロセウムへも送れやしない！>

こう言って、ターリアを殺すために燃えている、その火の中へ奥方と秘書官をいっしょに投げこむように命じました。秘書官はこの邪悪な遊びの引き手であり、悪質な陰謀の織工でもありました。そして、殿様はコックが肉切り包丁で子供たちを切り刻んだものと思いいこんで、彼にも同じ罰を課そうとしました。だが、コックは殿様の足もとに身を投げだ

して、こう言いました。《まことに、殿様、もしわたしがあの燃えさかる火の中に投げ入れられたら、わたしが殿様に示した忠誠と引き替えに、ただもう、消し炭のかまど同然の、死んだ臣下がほしいとお望みになるのと変わりございません。そして、ただもう、わたしが火の中であがき苦しんで、感覚を失っていくのを楽しく味わいたいと、お望みになるだけでございます。また、殿様はただもう奥方の灰と、このコックの灰がかきまぜられるのを見る名誉だけを、お望みになるだけでございます。しかし、これは犬の胆汁にもかかわらず、お子様たちの命をお助けしたことに、わたしが期待している、殿様の感謝ではございません。犬の胆汁は同じ体の一部だった、殿様のものをお体に返すために、お子さまたちを殺させようと、思いました》

この言葉を聞いた殿様は茫然として、ただ夢を見ているようでした。そして、殿様の耳は今自分が聞いたことを信じることができませんでした。それから、コックのほうに向き直ってこう言いました。《しかし、お前がわしの子供たちの命を救ったことがまことだったなら、今後はお前を焼き串を廻す仕事から解放し、そのかわり、お前の思うままに、わしの願望を廻すために、この胸の台所のなかにならずお前の定位置を作るとしよう。そして、この世で幸福な人間と呼ばれるだけのほうびを取らせるであろう》

殿様がこう言っている間に、夫の必要としているものを理解したコックの妻は、ルーナとソーレを父親の前に連れてきました。殿様は妻や子供たちと喜びたわむれて、それこそ、一人々と旋風のように接吻しました。そして、殿様はコックにかかえきれぬほどのほうびを与えて、彼を部屋付きの侍従に任命し、ターリアは結婚して妻となりました。彼女は夫や子供たちと共に長生きしました。そして、運のいい人は、眠っていても幸福をつかむものだということを、だれよりも知っていました。

3) ペローの《眠っている森の美女》とバジールレの《ソーレ、ルーナとターリア》

a) ペローの《眠っている森の美女》

バジールレのメールヘンの内容は以上の逐語訳で、だいたいおわかりのことと思う。ところで、ペローの《眠っている森の美女》の筋書もこれとひじょうによく似ているのに、私どもはおどろく。

王女は糸巻棒で手をついて気を失い、百年の間眠りつづける。このように、ペローの物語でも、姫の長い眠りの動機は糸巻棒に関係がある。ちょうど百年たった頃、眠っている王女の寝ている宮殿に現われる王子が、他国の人間であることも、道具だてがバジールレのと同じである。だが、彼は独身であった。愛と名誉心に動かされた、冒険心に富む王子がお姫さまのベッドに近づき、ひざまづいただけで魔法はとけ、王女は眠りからさめる。ペローは王女が百年の眠りからさめて、王子と城の中の礼拝堂で結婚式を挙げるまでの経過を、子供によくわかるように美しく、童話風に描いて見せている。王子の母である王妃がオロール（女の子）とジュール（男の子）とその母親である若い王妃を食べたいと、コック長に言う。この人食い鬼はバジールレの話の奥方と、本質においては変わりはない。ただバジールレのメールヘンの奥方のほうが、はるかに残忍きわまりない性格の女である。コック長が王妃の食いたがっているオロールの代りに小羊の肉を、ジュールの代りに小ヤギの肉を出す場面も、バジールレの物語の暖い心を持つコックの処置と同じである。最後に、王妃が二人の子供と若い王妃を投げこませようとする、ヒキガエルや蛇のいっばい入った

桶は、バジールの火あぶりの刑とは違っているけれども、彼らを亡き者にしようとする王妃の心には変りがないであろう。ただ、ペローのこのコントの結尾に添えられた《教訓 MORALITÉ》が違っている。《金持ちで、美男子で、上品な、やさしい夫と結ばれるために、しばらく待つということは、当然すぎるぐらいであります。でも、夫を百年間も、眠りつづけながら待つということ—そんなに静かに眠っているような女性は、今どきどこにもいないでしょう。

この物語の主題は、さらに、つぎのことを理解させようとしているように思われます。すなわち、結婚の時期は遅れても、意にかなった夫婦の生活はやはりしあわせな場合が多く、長い間待っても損はないものです。でも、女性は結婚にとっても熱烈に憧れるから、わたしはこの教訓を説きすすめる力も勇気も持合わせていません》

ペローの8篇の昔話は前にものべた通り、ペローがフランスに昔から語りつがれてきた民間の物語を、きわめて忠実に文学として再現したものだと、言われている。もちろん、これらの8篇の昔話には、*littérature écrite* としてのペローのスタイルの統一はあるだろう。さて、ペローの《眠っている森の美女》の源流について、わたしは再びマルク・ソリアーノ (Marc Soriano) の《ペローの昔話—学問的研究と民間伝承 *Contes de Perrault—culture savante et traditions populaires*》から学ぶことにする。

マルク・ソリアーノは《ペローの眠っている森の美女に関してだけ、フランスの口伝は見出しえないだろう》と書きしるし、さらに現代の専門家マリ・ルイズ・トゥネーズ (Marie-Luise Tenèze) の説を紹介している。

《ペローの昔話のうちで最も人気ある物語の一つであり、子供むけの本として一番多く再話が発行された、この昔話は全くと言ってよいくらいにフランスの民間伝承が欠けている。フランスにとって真実であることは、ドイツ、イベリア半島、イタリア、ギリシャ、ロシア、アラビア等の国々にもあてはまるであろう。これらの国々の採集した珍しい物語の源流は、つまるところは書物からえた知識に帰する。ペローの“眠っている森の美女”は、見たところはいかにも民話らしいけれども、つぎの書物の源泉とつながりがありそうだ。すなわち、バジールのペンタメローネと14世紀の二つの作品、ペルスフォレ *Perceforest* のトロワリュと美しきゼラディヌの物語と、カタロニアのノヴェッレ *Frère-de-Joie, Soeur-de-Plaisir* である》

b) ペルスフォレ (*Perceforest*) のトロワリュ (*Troilus*) とゼラディヌ (*Zeladine*) の物語

《ソーレ、ルーナとターリア》のような物語が、バジールの《ペンタメローネ》が発行される以前から世間に流布していたことは、14世紀のブルターニュのロマン《ペルスフォレ *Perceforest*》が一つの証明となろう。この膨大な散文の物語集は1528年にフランスで印刷されると、早くも1531年にはイタリー語に翻訳された。ペルスフォレの意図はアレクサンダー大王と大ブリテンのアーサー王の伝説を結びつけようとしている。この書物の《トロワリュとゼラディヌの物語》の章はつぎのような内容である。

王女ゼラディヌの誕生を記念する宴会に、ヴィナス、ルチーナと、テミスの三人の神が招かれました。テミスの前には食事用のナイフがおかれていなかったの、自分がないが

しろにされたと感じました。女神デミスはなにも知らない姫を呪うことで、彼女の不満を表わしました。呪いの確かな特質が知られていないので、王女をその呪いの効果から守ろうと試みることもできません。しかし、王女は《眠り姫》と同じ運命を辿らねばなりませんでした。

王女は少女の手から亜麻糸をいっぱい巻いてある糸巻棒を取ると、つむぎ始めました。ところが、一本めの糸もつむぎ終わらないうちに、王女はたちまち睡魔におそわれたのでベッドへ行きました。ひじょうにぐっすりと眠りこんでしまったので、だれも彼女を目ざますことができませんでした。ゼラディヌは飲食物を取りませんでした。姿形や顔色がすこしも変わらなかったで、生きつづけているのがふしぎだと、思わない者はいませんでした。

数年たって、トロワリュ王子は塔の中で眠っている王女の所へ行ったとき、眠っているターリアの体を襲った王と同じように、遠慮のない、むとんちゃくな態度で振舞いました。このようにして、ゼラディヌは深い眠りからさめたとき、彼女は子供といっしょにいる自分に気づきました。

さらに、マリ・ルイズ・トゥネーズはジャンヌ・ロー (Jeanne Lods) の《ペルスフォレ物語集 Roman de Perceforest, Paris, Droz, 1951》から、彼女の説とは違う結論を引用している。

《バジールが1525年にイタリア語に訳されたペルスフォレを知っていたことは考えられる。だが、イタリアの物語作家もペルスフォレの著者も、また、Frère-de-joie, Soeur-de-plaisir の作者も知っていた、物語の一つの型があったと言うほうが妥当性があるだろう》

4) グリムの《いばら姫 Dornröschen》とペローの《眠っている森の美女》とバジールの《ソーレ、ルーナとターリア》

a) グリムの《いばら姫》の内容紹介

王様と女王様は全然子供ができなかったで、子供がほしくてたまりませんでした。あるとき、女王様が水浴びをしていると、一匹のザリガニが陸にはいあがってきてこう言いました。《あなたの望みが近いうちに満たされ、娘さんを生むでしょう》

ザリガニの予言はみごとにあたりました。だから、王様は王女の誕生をひじょうに喜んだので、大がかりな宴会を催させました。祝宴にはその国の仙女も招待しました。ところで、金の皿は12枚しかなかったで1人の仙女を招待できませんでした。つまり、仙女は全部で13人いましたから。仙女たちは祝宴の席にやってきて、宴会が終わったとき、お姫さまに贈物をしました。ある仙女は徳を、二番目の仙女は美しさを贈りました。このようにして、他の仙女たちもだれもがほしがっている、およそこの世ですばらしい、すべての物を贈りました。しかし、ちょうど11番目の仙女がお姫さまに贈物の名を言ったとき、13番目の仙女が招待されなかったことをプブリ怒りながら入ってき、大きな声で言いました。《あなたがたはわたしを招待しなかったから、お姫さまは15才になると、はたおり機をつむで手を刺し、倒れて死ぬでしょう》両親はびっくりしました。ところで12番目の仙女がお祝いの言葉をいわねばなりませんでした。《しかし、お姫さまは死にません。ただ100年の間ぐっすり眠りつづけるだけです》

王様は愛する子供をそのような目に会わせたくないと願ったから、国中のはたおり機をつむを、のこらず処分するように命令しました。しかし、王女のほうは成長するにつれて、美しさも肩を並べる人がいませんでした。王女は15才になりました。ある日のこと、王と女王は姫をお城の中にひとり残して外出しました。姫は自由気ままにほうぼう歩き廻ってから、ある古い塔に着きました。塔は狭い階段が上に通じていました。彼女は好奇心に富んでいたもので、階段をどんどん昇っていき、小さなドアに行きあたりました。ドアに黄色い鍵がささっていたので、それを回しました。すると、いきなりドアがあきました。姫が小さなへやに入っていくと、そこには老婆が亜麻糸をつむいでおりました。

姫は老婆が気に入りました。彼女は老婆と冗談を言ったりした末に、彼女も糸をつむいでみたいと言いました。そして、老婆の手からつむを取って、それに触れるか触れないうちに、それで自分の手を刺し、あっという間に深い眠りに落ちてしまいました。その瞬間、王様は家来を引きつれて帰ってきました。ところが、すべてのものが眠りはじめました。馬小屋の中の馬も、屋根の上のハトも、中庭の犬も、壁にとまっているハエも、そればかりか、かまどの上でゆらゆら燃えていた火さえも、静かになって眠りこみました。あぶり肉もジュジュいなくなりました。コックはボーイの髪の毛を引っばろうとしたが、手放しました。女中は羽毛をむしり取っていたニワトリをボトリと落として眠りました。お城のまわりを、いばらの生け垣がとり囲んでおり、それがぐんぐん高く伸びていき、とうとうお城の姿はすっかりかくれてしまいました。

美しい《いばら姫》の話聞いた王子たちがやってきて、姫を自由にしてやろうとしても、いばらを押し分けてつき進むことができませんでした。いばらが彼らの両手にびったりとくっついたようにみえました。王子たちはみんな、いばらの藪の中から身動きができずに、痛ましい最期をとげました。そのような出来事が長い年月の間つづきました。ところが、あるとき、一人の王子がその地方を通りかかりました。古老が王子にこんな話を物語りました。《そのいばらの藪のうしろには、お城があります。この世の人とも思われないほど美しいお姫さまが、その中に全部のご家来といっしょに眠りつづけています。だよ。わっしのおじいさんから聞いたところでは、たくさんの王子さまがおいでになり、いばらの藪を押し分けて進もうとして、それにひっかかったまま、いばらに刺されて命を失ったということです》

王子は《そんなものに恐れるものか。いばらの藪をつき進み、美しいいばら姫を自由にしてやるぞ》と言って出かけました。いばらの藪のところになると、見える物といえば花だけでした。花は両側に分れて道ができ、王子がつき進んでゆくと、そのうしろは、いばらの藪になりました。お城につきました。馬と色とりどりの獵犬が中庭で眠っていました。ハトは屋根の上にとまっていて、小さな頭を羽のなかに入れていました。部屋に入ると、ハエも壁にとまって眠っていました。台所のなかでは、火もコックも下女も眠っていました。あたりはひじょうに静かで、王子は彼自身の呼吸がきこえるように思いました。最後に古い塔にきたとき、そこには、いばら姫が横たわっていて眠っていました。そのとき、王子は王女の美しさに目をみはっておどろいたので、体をかがめてキスしました。その瞬間、姫はパッチリと目をさました。王様も女王さまも、すべての家来も、馬も犬も屋根の上のハトも、壁にとまっているハエも、目をさました。火も起きあがってゆらゆらと燃え、料理もできあがり、焼肉もジュジュと音をたてつづけ、コックはボーイの頬

をなぐり、女中はニワトリの羽根をむしりおえました。そこで、王子と王女の結婚式がとり行なわれ、二人は幸福に一生をすごしました。

b) グリムの《いばら姫》とペローやバジール・メルヘンとの関連

グリムの《いばら姫》の全訳は以上の通りであるが、これはグリム兄弟がバジール・メルヘンの《ソーレ、ルーナとターリア》やペローの《眠っている森の美女》のモチーフと筋書を借用し、二つのロマン語系の昔話に共通した《王家の家庭上のいざこざ》をきれいに整理して、子供や家庭のためのメルヘンに改作したものではない。特に、バジール・メルヘンの話の女王が夫が外に作った二人の子供を料理させて、それを夫に食べさせようとするくんだりや、ペローのコントの王妃が人食い鬼の性格を持っていることなどは、どう考えても子供向きではない。《いばら姫》はやはりグリム兄弟がヴィルトという薬局の家政婦《マリーおばあさん *die Alte Marie*》の語ったものを採集し、1812年発行の《子供と家庭のメルヘン》第一巻に収めたメルヘンである。

グリムの《いばら姫》はバジール・メルヘンの《ソーレ、ルーナとターリア》やペローの《眠っている森の美女》と同じ型の民話をグリムが採集したには違いないが、バジール・メルヘンの物語をペローが子供を喜ばすために手を加え、さらに、ペローのコントが変形されてマリーおばあさんに語りつがれたのでないことも明らかである。つまり、筆者はバジール・メルヘンの話と同一のヴェルシオンの変形ではないことを主張したいのだ。では、グリムの《いばら姫》に欠けている《王家の家庭上のいざこざ》の後日譚を含んだ民話は、ドイツの国土には語りつがれていなかったのだろうか？ そういう疑問がふっと筆者の頭に浮ぶ。だが、グリム兄弟はそういう民話を4種類ほど抜け目なく採集している。すなわち《12人の兄弟 *die zwölf Brüder*》、《7羽の白鳥 *die sieben Schwäne*》、《兄と妹 *Brüderchen und Schwesterchen*》および《マリアの子 *das Marienkind*》である。

いま《12人の兄弟》の序奏にあたるこまごました部分を省略して、王女と王が結ばれるくんだりから、《王家の家庭上のいざこざ》までのあら筋をのべてみよう。

末子の王女は12人の兄たちを救うために、高い木の上で糸をつむぎながら、黙ったまま12年間すごそうと思っています。でなければ、12羽のカラスに変えられた兄たちを自由にすることができないのです。ある時、他の国の王が猟にきました。犬がしきりに吠えるので木の上を見あげると、そこに坐っている王女の美しさに目をみはっておどろきました。王の求婚にたいして、王女はただうなずいたきりで、妃になることを承諾しました。お城では盛大な結婚式がとり行なわれたが、妃が一言もしゃべらないので、王は彼女をおしだと思いました。王の母親は嫁が気に入らないので、息子のいる前で嫁を中傷しました。

《お前の妻はどこの馬の骨だか、わかったものじゃないよ。この女ときたら、お前に隠れてとても恥ずべき事をしてるんだ！》

王妃は弁解のことばをしゃべれないので、王は母親のことばを信じ、彼女を処刑しようとしします。中庭に大がかりな火を起こして、そのなかで王妃を焼くことになりました。火は彼女の服をなめはじめました。ちょうどその時、12年の最後の瞬間がすぎりました。空中にざわめきが聞こえたかと思うと、12羽のカラスが舞いおり、地面に着いたとき、12人のすてきな王子に変わり、火の中から妹を助けだしました。そのとき、妹ははじめて口を開き、王に事の一部始終をしゃべりました。そこで、すべての人が満足しました。邪悪

なま母は煮えたっている油と毒蛇のいっばいつまっている桶の中に投げ入れられ、ひどい最期をとげました。

《12人の兄弟》のメールヘンの《王室の家庭上のいざこざ》という後日譚はバジールとペローのそれをつきまぜたように見えて、ひじょうに興味ぶかい。

IV 《童話》と《メールヘン》

こんにち《童話》という術語ほど安易に使用されていながら、案外とその正確な概念が理解されていないことばはないだろう。《童話》とは通俗的には《子供のためのお話》などと、簡単に片づけ、平然とすましている人がある。もしもそれで充分な、正しい説明だとしたら、子供の大好きな《マグマ大使》とか《仮面ライダー》あるいは、おとなの中にもファンのいる《ユーフォ UFO》の話も《童話》と呼ぶことができるだろう。

新村出編の《広辞苑》の《童話》の項では《(イ)…童心を基調として児童のために作られた物語。(ロ)…お伽話といわれたものから次第に発展し、伝説・説話・寓話などを含む》と説明している。この説明こそ、第二次大戦後、日本でもひんぱんに使われるようになった《児童文学》というジャンルに相当するのではなかろうか？従って、科学・歴史・伝記小説の文学的にすぐれたものなども、広辞苑の《童話》の概念に入れることができるであろう。広辞苑のこの説明のうちで、《童話》と直接関係があると思われる語は《お伽話》であろう。

内山憲尚の《童話学入門》には《お伽話と童話》についてこう記してある。

《童話学的な立場では、広義の童話の中で神仙の出てくるものを「お伽話」と考えることが出来るのであるが、これを歴史的立場から解釈するなれば、お伽話と童話は同じものであるということが出来るのである。》と前おきして、明治に入ってから日本の少年雑誌を歴史的に紹介し、明治29年10月に巖谷漣山人の編集で、博文館から《日本お伽噺》24編の企画を発表したと結び、明治に入ってからのお伽噺という言葉の語源を説明している。さらに内山氏はこうつづけている。

ところが、日本で《童話》という文字が初めて使用されたのは、徳川時代からである。滝沢馬琴の《燕石棟志えんせきざし》巻之四の⑤の桃太郎に、《童語に、昔老夫婦ありけり》とあって、童話を《わらべものがたり》と読ませている。また、山東京伝の骨董集上編中之巻の二十一に「打手小槌、猿蟹合戦」に《祖父祖母之物語とあるは、むかしむかしちちとばばとありけり、といふ発語をとりて、名目にしたるものなるべければ、童の昔ばなし、いとふるきことなり、おのれ二十四五年前、童話の出所をたづねて書きとめたるも、童話考と名づけし一冊あり。》とあって、むかしばなしと読ませている。

さて、ドイツ語の《メールヘン Märchen》をすこしのためらいもなく《童話》と訳してしまうことに、いささか抵抗を感じるのは、わたしひとりではないだろう。

エーベルハルトのシノニム辞典は《メールヘン》という語をつぎのように説明している。

《メールヘン Märchen は寓話 Fabel や物語・説話 Erzählung とシノニムである。

Märchen という名詞は Märe f. (中高ドイツ語 maere; 古高ドイツ語 mări) の縮小詞で、喜んでさかんに語られることという意味から、知らせ Kunde, 報告 Bericht, 説話 Erzählung という意味を持つようになった。メールヘンとは、ふしぎな物ごと、信じられない物ごとを、空想的に粉飾した手法で物語った創作をいう。たとえば、グリム兄弟の7羽の

カラスのメールヘン *das Märchen von den sieben Raben*》エーベルハルトの《メールヘン》の語源と意味の変遷に関する説明は正しいとしても、メールヘンの例の文学的説明は、創作メールヘン *Kunstmärchen* と民間説話 *Volksmärchen* を混同する誤解を生むうらみがある。ドイツ語の *Märchen* にあたる英語は *Tale* または *Story* で、フランス語は *Conte*、イタリア語は *Racconto favoloso* だとエーベルハルトは説明する。だが、イタリア語についてだけ一言するならば、ジャムパティスタ・バジレ (*Giambattista Basile*) の《ペンタメローネ *IL PENTAMERONE*》の副題《物語中の物語 *LO CUNTO DE LI CUNTE*》をベネデット・クローチェ (*Benedetto Croce*) は《*LA FIABA DELLE FIABE*》と現代イタリア語に訳している。ドイツのフェリックス・リーブレヒト (*Felix Liebrecht*) の完訳 (1846年) である《ペンタメローネ》のドイツ語の表題は《*Der Pentamerone oder Das Märchen aller Märchen von Giambattista Basile*》とあるから、*Märchen* にたいするイタリア語は *Fiaba* である。

マックス・リュティ (*Max Lüthi*) はその著《メールヘン *Märchen*》のなかで、ボルテ・ポリヴカ (*Bolte-Polívka*) のメールヘンの概念の説明を引用している。

《メールヘンとはヘルダーおよびグリム兄弟このかた、詩的なファンタジーで書かれた、とくに魔法の世界の物語をさしている。または、たとえ信じられなくても、実生活の諸条件とは無関係な、ふかしぎな話をいい、これを貴賤の別なく、だれもが大いに喜んで聞くのである》

メールヘンのこの概念からも明らかなように、ドイツ語の《メールヘン》はかならずしも《童心を基調として児童のために作られた物語》だけをさしてはいない。また、リュティは同書の中で、メールヘンと、その周辺のジャンルである《伝説、聖人伝、神話、寓話、笑話》とをはっきり区別している。

メールヘンの創作の対象を児童だけに限定していない作品例として、ルート・シャウマン (*Ruth Schaumann*) の《パセリの花園 *Der Petersiliengarten—Ein Märchen*》を挙げてみたい。この作品は表題の下に《一つのメールヘン》という説明がついている。この小品は子供にも理解できておもしろい部分も多いが、全体として《人間の平和への熱望、憎悪を愛に変える寛容の精神、性の純潔、結婚生活の神聖とその賜である子供の尊重》というような問題を軽妙な風刺とユーモアをまじえて描いている。まったくと言ってよいほど、成人向きのメールヘンである。

あ と が き

グリム、ペロー、バジレという、ヨーロッパのメールヘンについて、今回はじめて論文とは言えなくても、《眠り姫》というテーマに関して考察してみたが、以上のようなおもしろい関連の糸がつかめそうだ。これについては、スイスのゲルマニストであったフリッツ・エルンスト (*Fritz Ernst*) の《三つの国語によるいばら姫 *Dornröschen in drei Sprachen*》という論文がある。これによると、三人はそれぞれの文学上の偉大な時期の終結後に活躍した学者、文芸評論家、詩人として、著名なメールヘン集を伝えていると、書いてある。イタリアのバジレの《ペンタメローネ》の《シンデレラ *La gatta cenerentola*》とペローの《サンドリヨン *Cendrillon*》、グリムの《灰かぶり姫 *Aschenputtel*》はテーマも事件も大変よく似ているから、今後の課題として研究してゆきたい。なお、バジ

ーレの《おんどのりの石 La pietra del gallo》はグリムと同時代のクレメンス・ブレンターノ (Clemens Brentano, 1778—1824) のイタリア・メールヘン集の一篇《ゴッケル、ヒンケル、ガッケライア Gockel, Hinkel und Gackeleia》のモチーフに使用されていることをつぎとめた。また、バジールの《Gagliuso》はおなじくドイツロマン派のルートヴィッヒ・ティーク (Ludwig Tieck, 1773—1853) の《長靴をはいた牡猫 Der gestiefelte Kater》という劇作品とも、なんらかの関連性があるらしいので、将来は《バジールとドイツ・ロマン派の詩人たち》について研究を進めたい。

グリムの《狼と7匹の小ヤギ》と《赤ずきん》、ペローの《赤ずきん》はいずれも、メールヘンというよりは寓話臭がつよい。ことに、ペローの《教訓つきの昔話》はコントとことわっておきながら、8篇の物語の結尾に古典的で典型的な寓話の特色である《教訓》がついている。これはペローが8篇の散文の昔話を発表する以前は、子供が心から楽しめる児童文学作品がなくて、聖書の挿話を子供のためにやさしく再話風に書き直して教訓書を作ったり、ラテン語の寓話をフランス語に訳して子供の読み物としていたことの影響ではなかろうか？ペロー自身ローマ時代のファエルネの (Faerne) 寓話集を、三人の子供たちのために仏訳することに専念したことがある。日本の昔話の中にも、教訓風の物語がたくさんあるのは、すでに読者もごぞんじの通りである。グリムの《狼と7匹の小ヤギ》や《赤ずきん》の二番目の話のように明らかに寓話から来ているのがわかるメールヘンがあり、上田敏が《動物譬喩談は民俗説話の一種である》(伊曾保物語考)と主張しているのを見ても、寓話と民間説話は密接な関係がある。

この小論はわずか3ヶ月の短時日で書きあげたため、不備の点がたくさんあると思うので、なにとぞ諸先生、諸先輩のご叱正を賜りたい。なお、イタリアの哲学者、ベネデット・クロチエは方言文学の研究者としても聞こえ、Giovanni Battista Basile がナポリ方言で書いた《IL PENTAMERONE—LO CUNTO DE LI CUNTE》を現代イタリア語に翻訳した。バジールの研究者としても第一人者であった。わたしは1974年から1年間ヨーロッパ留学中、ナポリに滞在している間に名古屋大学の生物学研究室の中埜栄三教授の紹介で、クロチエ研究所に通うことを許された。お蔭でバジール関係の文献資料に接することができた。また、ナポリの Istituto Universitario Orientale の Seminario di Yamatologia から招かれ、同所の Luigi Polese Remmaggia 教授から《ペンタメローネ》の講義を受け、学ぶところが大きかった。ここに改めて二氏に心からお礼を申しあげる。最後にこの小論のあらましは、この8月16日、日本比較文学会の東京支部例会で口頭発表し、諸先生がたのありがたいご批判を頂いたので、あわせてお礼を申すしだいである。30. 8. 1975 北垣 篤

参 考 文 献 一 覧 表

このささやかな論文を書くに際して、参考させて頂いた著書および訳書は下記のとおりです。それぞれの著者ならびに訳者に、心から厚くお礼を申し上げます。

- 柳田泉編： 明治文化資料叢書・第九巻・翻訳文学篇 (昭・34 風間書房)
 明治文化全集・第十四巻翻訳文芸篇 (昭・2 日本評論社)
 小波作・桂舟画： 明治のお伽噺・上巻 木村小舟編 (昭・19 小学館)

- Friedr. von der Leyen: Das deutsche Märchen und die Brüder Grimm (1964 Eugen Diederichs Verlag)
- Wilhelm Schoof: Zur Entstehungsgeschichte der Grimmschen Märchen (1959 Dr. Ernst Hauswedell & Co, Hamburg)
- Marie de France. —Eingeleitet, kommentiert und übersetzt von Hans Ulrich Gumbrecht (Klassische Texte des Romanischen Mittelalters in zweisprachigen Ausgaben. Band 12. Wilhelm Fink Verlag, 1973)
- Charles Perrault: Contes (Classique Larousse)
- Deutsche Märchen vor Grimm—Einführung und Anmerkungen von Albert Wesselski (Rudolf M. Rohrer Verlag, 1942)
- Perrault: Contes présentés par Marcel Aymé et suivis de "Perrault avant Perrault", textes choisis et commentés par Andrée Lhéritier (1964—Union Générale d'Éditions)
- Ludwig Mader: Antike Fabeln (Artemis Verlag)
- Marc Soriano: Les Contes de Perrault—culture savante et traditions populaires (Éditions Gallimard, 1968) 茨城大学 請求番号 950 168
- 内山憲尚: 童話学入門(昭・32 東京文化研究所出版部) 茨城大学 請求番号 909 11
- Max Lüthi: Märchen (Sammlung Metzler 1964)
- Max Lüthi: Das europäische Volksmärchen (A. Francke Verlag Bern, 1974)
- Johannes August Eberhard: Synonymisches Handwörterbuch der deutschen Sprache (Th. Grieben's Verlag, Leipzig. 1889)
- Brüder Grimm: Kinder-und Hausmärchen (Fischer Bücherei)
- 改訳グリム童話集・第一冊・金田鬼一訳(岩波文庫—昭・31)
- J.-P. バイヤール・田辺貞之助訳: 伝説の歴史(文庫クセジュ・白水社1958)
- Ruth Schaumann: Der Petersiliengarten. —Ein Märchen (Insel Verlag)
- ルート・シャウマン著—佐々木斐夫・秋山延久訳: 「アマイ」(昭・17 実業之日本社)
- ポール・アザール著・矢崎源九郎・横山正矢訳: 本・子ども・大人(紀伊国屋書店1968)
- Kinder-und Hausmärchen gesammelt von den Brüdern Grimm—Ausgewählt v. Ludwig Bencker (Verlag Carl Schnell, München)
- シャルル・ペロー・今野一雄訳: 眠れる森の美女(角川文庫・昭・38)
- Brüder Grimm: Deutsche Sagen—Zwei Bände in einem Band (Winkler-Verlag München)
- 茨城大学 請求番号 388 32
- Grimms Märchen 1—Die Märchen der Weltliteratur (Eugen Diederichs Verlag) 茨城大学 請求番号 909 8-1 3
- Grimms Märchen 2—Die Märchen der Weltliteratur (Eugen Diederichs Verlag)
- 茨城大学 請求番号 909 8-2 3
- Italianische Märchen —Die Märchen der Weltliteratur (Eugen Diederichs Verlag)
- 茨城大学 請求番号 909 11 3
- Giambattista Basile: IL PENTAMERONE ossia La FIABA DELLE FIABE—Tradotta dall'antico dialetto napoletano e corredata di introduzione e note storiche di Benedetto Croce—Prefazione di Italo Calvino volume terzo (Editori Laterza 1974)
- Iona and Peter Opie: The Classic Fairy Tales (Oxford Univ. Press 1974)
- 関敬吾著: 民話(岩波新書 昭・37)